書評

ヴァレリー散文詩の位置

Paul Valéry, *Alphabet*, édition établie, présentée et annotée par Michel Jarrety, Le livre de poche classique, 1999.

東北大学　　今井 勉

ヴァレリー関連の出版と言えば、現在ガリマールから刊行中の完全活字版『カイエ 1894－1914』（既刊 7 巻）とヴァレリー研究者による論文が中心で、新編集によって一般向けに刊行される作品テクストは稀である。「カイエ」と草稿という言わば裏のテクストの研究に忙しい「ヴァレリー学」の世界と一般のヴァレリー受容との距離がますます広がっているように見える現状にあって、今回、ミシェル・ジャルティ氏の手によって、ヴァレリーの未刊かつ未完の唯一の散文詩集『アルファベ』が、最新の研究成果を取り入れつつ、普及版の形で出版されたことは、研究者にとってだけでなくヴァレリー読者一般にとっても、意義深く喜ばしいことと言わなければならない。

まず、『アルファベ』が未刊かつ未完である点について簡単に触れておく。『アルファベ』は 1924 年、或る書店主が画家ルイ・ジューの彫刻によるアルファベット（フランス語では稀な K と W の二文字を除いた）二十四文字のイニシャル飾り字（lettrine）をヴァレリーに見せ、各イニシャルで始まる二十四篇の散文詩からなる詩集を作ってはどうかと持ち掛けたのが発端で、つまりは、『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』や『ユーパリノス』と同じ受注生産によるテクストである。ヴァレリーは二十四篇の詩をそれぞれ一日の二十四時間に対応させようと考え、さっそく制作ノート「ABC」（現在フランス国立図書館所蔵）を作って詩作に入る。大部分の文字についてはかなり早い時期に完成段階に達したと見られるが、幾つかの文字については、長期にわたる推敲の末、複数のヴァージョンが生まれる結果となった。ヴァレリーはその後、独立に数篇を雑誌発表しているが、一冊の詩集の形としては、詩篇によって完成度がちぐはぐであることなどから、結局、生前出版することがないまま終わった。没後三十年を経た 1976 年に娘のアガート・ルアール・ヴァレリーの手で 180 部限定版が刊行されているが、その限定版は各文字について一つのヴァージョンのみの提示であって、いかにも娘アガートの恣意性が前面に現れた形のものだったのに対して、複数のヴァージョンを考慮に入れ、しかも、周到な序文と関連資料紹介を付して、普及版の形で読めるようになったのは、今回のジャルティ版が初めてである。表紙扉下に inédit と打たれている所以である。もちろん、作品が未完成である以上、一定の形に編集する段階で編者の恣意性が働かざるをえないだろうという批判は当然生じる。しかし、ジャルティ氏は、制作ノート「ABC」に加え、ヴァレリーがほとんどすべての文字の詩篇をタイプ打ちさせた 1935 年のタイプ原稿、出版を目指して 1937－1938 年になされた加筆、メモ、新ヴァージョンの執筆などから成る『アルファベ』関連資料が十分に一冊の書物になりうる資料体を構成している、と判断し、複数のかなり異なるヴァージョンがある文字については、煩瑣にならない限りにおいて、それを収録するという方針を採って（今回の版

では、G、Ｊ、O、Tが二篇ずつ、Mが三篇収録されている)、恣意性批判をあらかじめ封じている。全草稿・全ヴァージョンに関する専門的な研究書があるにこしたことがないのはもちろんだが、あくまでも一般読者に向けて、しかも、専門的見地からも説得的な手続きを踏んで編まれた版を出そうとのジャルティ氏のぎりぎりの姿勢は、高く評価すべきものと思われる。

次に、『アルファベ』の内容について、ジャルティ氏の長文の序文（pp.5-33）の解説に依拠しつつ、かいつまんで紹介しておく。当初計画された二十四時間の詩という考えは、散文詩において一定の形式的規制を設けたいヴァレリー詩学の要請に基づくが、真の時間とは抽象的なクロノロジーの時間ではなく感覚の時間だと考えるヴァレリーにとって、時計の二十四時間に詩のモメントを合わせるという課題はそもそも無理があったようだ。事実、『アルファベ』に描かれる主要なモメントの流れは、まず、眠っている自分を眺める存在の分裂（このテーマは青年期のやはり未完成に終わった散文詩『アガート』に直結するだろう）から始まって、「身体」の目覚め、「観念」の出現への待機、昼食へと至り、次に、午後になると、女性の形象が現れ、愛をモチーフとする一連のモメントの描写に続いて、Vにおいて合一が達成されたあと、深夜の問いかけでもって終わるというものである。厳密な二十四時間の詩ではなく幾つかのテーマをめぐる詩である。G までは主題が「身体」の目覚めと「精神」の目覚めをめぐっていることはたしかであるが、詩集全体の力点は執筆の過程で次第にエロス性の強調、性愛に関わる感情の喚起に向かっていく。事実、ヴァレリーが折に触れて記す『アルファベ』関連のメモは次第に、「*Alph.Er.*」（アルファベ、エロス）という略記号のもとに書かれることが多くなり、エロスのテーマが強く意識されていることがわかる（「愛の期待」「情愛のアルファベ」といったメモの例が pp.139-142 に紹介されている)。こうしたエロスの主題の前景化は、ヴァレリー個人の経験と切り離すことが出来ない。というのも、『アルファベ』の大部分が書かれた時期は、カトリーヌ・ポッツィと親密な関係にあった年代と一致するからである。ジャルティ氏は「M から V までの詩篇にはポッツィの影が密かに看取される。欲望された接近と苦渋の内に耐えられる距離とがかわるがわる現れる O の詩がその好例であろう」（p.11）と指摘している。個々の詩篇の綿密な読解は今後盛んに行われるはずであるから、ここでは、一点だけ、このヴァレリー唯一の散文詩集が出たのを機会に、ヴァレリーにおける散文詩の位置について若干の私的なメモを記しておくことにしたい。

ヴァレリーと言えば、詩のフォルムを最重要視した古典主義的詩人、マラルメと同様に韻文の言語と散文の言語を厳しく峻別した詩人というイメージが強い。実際、彼の様々な詩論を読めば、その一般的イメージに間違いのないことがよくわかる。しかし、実際のヴァレリーは単なる韻文詩人ではなかった。『若きパルク』のアレクサンドランの完成度、『魅惑』の諸詩篇の定型詩としての完成度がどれほど疑いの余地のないものであろうと、彼は、一方で、韻文詩の公的栄光の影に隠れて目立たぬ位置にあるとは言え、散文形式の詩を数多く書いているのである。先にも触れた初期の未完散文詩『アガート』や今回の『ア

ルファベ』のように、草稿やタイプ原稿などの資料が十分な質量に達している散文詩もあれば、ヴァレリー自身が PPA（Petits Poèmes Abstraits）という名で呼んだ数多くの散文詩が「カイエ」の至るところに見出される。さらに、作品テクストの草稿を読んでいると即興的な散文詩にぶつかることもしばしばである（例えば、デビュー作『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』の執筆初期の草稿には、飾り字体を用いた、明らかに散文詩と呼べる記述がある）。韻文詩と散文詩のこうした公私明暗の対立関係について、あえて図式化するならば、ヴァレリーは、読者一般に向けた公的エクリとしては韻文詩を、自分の精神の動きに関するヴァレリー独自の私的エクリとしては散文詩を、というふうに或る程度使い分けていたところがあるように思われる。

この使い分けについては、例えば、『若きパルク』の意識のドラマと、初期作品系列の最後を形作る未完散文詩『アガート』の精神のドラマを対比して考えてもよいし、『魅惑』の中の女性の形象を描いた詩篇と今回の『アルファベ』の午後の愛のドラマを対比して考えてもよい。いずれも、韻文詩形式ではヴァレリー個人にまつわる私的ドラマ（知性の劇であれ感情的なドラマであれ）の色合いは韻文の形式的要請によって言わば隠蔽される度合いが高いのに対し、散文詩形式ではヴァレリー個人の独自な私的ドラマの色合いがストレートに濃厚であるとは言えないだろうか。言い換えれば、ヴァレリーにおいて、散文詩テクストの多くが一般に公開されずに終わり、しかも、未完成の場合が多い理由のひとつに、散文詩テクストは、韻文のような厳密な形式的要請を欠いているがゆえに、より迫真的だとヴァレリーが考える独自の精神の劇を追求する自由があると同時に、自由であるぶんだけドラマの形象化がかえって難航する状況に追い込まれがちだったということがあるのではないか。また、より積極的な言い方をすれば、韻文に比べて言わば弛緩した散文形式の中で、作品の完成を目指すよりは作りつつある生成の相のままテクストを放っておくことのほうが、ヴァレリーの場合、テクスト生産の在り方としては、より真実であったということもあるだろう。その意味では、おそらく、ヴァレリーという詩人思想家のもっとも面目躍如たる詩的テクストは、完成度において疑いの余地のない、人口に膾炙した公的な表通りの韻文詩テクスト群であるよりは、むしろ、未刊かつ未完に終わった私的な裏通りの散文詩テクスト群、すなわち、作品草稿にふと現れる一句、「カイエ」に現れる抽象詩・素材詩・未成詩、そして『アガート』や『アルファベ』のような「完成」一歩手前まで行ったと見える散文詩（あるいは散文詩的）テクスト群である、という言い方もかなりの程度許されるのではなかろうか。今後、今回のジャルティ版『アルファベ』の刊行に続いて、未刊かつ未完のテクストを含めたヴァレリーの散文詩テクスト群が最新の研究成果の上に立って新しく編まれることがあるならば、固定した詩人像はいったん崩れて、残されたテクストにより近い詩人思想家像が浮き彫りにされることは確実だと思う。その結果として、「カイエ」以後のヴァレリーの「煉獄」にもようやく光が射し始めた、と言えるようになるかどうかはわからないとしても。